

「ブライトサイド・ストーリー」

荒木 勇人

登場人物

望月 昇 もちづきのぼる  
(17)

高校生 スーパーのアルバイト

望月 照彦  
(43)

父

望月 光 ひかり  
(41)

母

日向 灯里 ひなたあかり  
(20)

大学生 同じバイト先

九条 修 くじょうおさむ  
(20)

大学生 灯里の元カレ

大海 航平 おおみ  
(21)

バイト先の先輩

土居 啓次  
(34)

バイト先の社員

星野 拓巳  
(43)

バイト先の店長

水嶋 翔太  
(17)

クラスメイト

木村 直哉  
(17)

クラスメイト

金田 雄一  
(17)

同級生

天野 京子 あまの  
(17)

同級生

河島 英夫 ひでお  
(46)

高校の英語教師

○高校・教室（朝）

日光の差し込む教室。

後方・窓際に座る望月昇（17）の席は日陰になっている。

河島英夫（46）、英語の授業中。

河島「ギブ・アンド・テイク：何かを与えて何かを得るという意味の言葉だ。ギブ・ア・チャンスだとチャンスを与えるになるがテイク・ア・チャンスには一か八かやってみるという意味もあって：」

水嶋「なあ望月、悪いけど：今日もいい？」

水嶋翔太（17）、隣の席から小声でプリントをヒラつかせながら言う。

望月「：うん、いいよ」

水嶋「マジ助かる。ここんどこ部活が忙しくて課題まで手回らないんだよね」

木村直哉（17）、望月の後ろの席で机に突っ伏して寝ている。

河島「おい木村、起きろ」

生徒たち、クスクス笑う。

○同・廊下（夕）

下校する生徒たち。

金田雄一（17）、友人たちと談笑中。

○同・教室（夕）

木村「悪い！完全に寝ちゃってさ……！」

と、両手を合わせて望月に懇願。

望月「もう……また？（と、呆れたように）」

鞆から英語のノートを取り出して木村に渡す。

木村「望月……！お前には頭が上がらないよ」

望月「授業中くらいは上げたほうがいいよ……」

○同・廊下（夕）

木村、教室から出て走っていく。

金田「おい木村、走るな……」

と、河島の声真似で注意し友人たちを笑わせる。

望月、教室から出てくる。

金田「……あ、望月」

望月「…ん？」

金田「日曜火野と地川とコート借りてテニスする約束してたんだけど、火野が来れなくなっちゃってさ。お前明日来れたりする？」

望月「えっ、でも僕テニスなんて…」

金田「大丈夫。ルールぐらい簡単に教えるしなんなら審判だけでもありがたいしさ」

望月「じゃあ：分かった」

金田「ほんと？　じゃあまた呼びに行く」

金田、すぐに友人たちとの会話に戻る。  
望月、小さく挙げた手を下ろして歩く。

○スーパー・青果売場（夕）

望月、売場の穴を埋めるよう品出し中。

望月M「他人にとって足りないものを埋めるだけの毎日。そんな僕の心にぽっかりと空いた穴を埋めてくれるのは、彼女の存在」

ふと手を止めレジに目をやると、日向灯里（20）がレジ打ちをする姿が。

土居「望月くん」

と、土居啓次（34）が望月の後ろに  
やってきて声をかける。

望月は灯里に見惚れて声に気付かない。

望月M「彼女は日向灯里。その名の通り僕の  
暗い日々を照らしてくれる太陽のような…」

土居「…望月くん！」

望月「（驚いて）はっ…はい！」

土居「忙しいんだからボーツとしないでね。

あとここ、汚れてるから後で掃除お願い。

じゃ、よろしく」

望月「はい…」

望月、土居が歩き去るのを確認して  
再びレジにいる灯里を見る。

望月M「でも、未だに挨拶を交わすだけの仲  
から進展できずにいる。同じバイト先とは  
いえ、部門が違えば会話を交わすチャンス  
など限りなくゼロに近い。僕はただ…」

視線に気付き振り向く灯里。

望月、咄嗟に視線をそらす。

望月M「こんなことを、繰り返している」

○古本屋（夜）

望月、レジに「ギブ・アンド・テイク」と題された本を持ってくる。

店員「450円です」

望月、500円を出しかけるがトレーに貼られた「1000円札不足中」の文を見て1000円札を出す。

店員「550円のお返しです」

望月、お釣りを財布に入れながら、

望月「ありがとうございます」

と、受け取って店を出る。

○帰り道（夜）

望月、フラストレーションを爆発させるように颯爽と自転車で駆けている。赤信号で止まって夜空を見上げるが、そこに月はない。

タイトル『ブライトサイド・ストーリー』

（手書きの文字が夜空に描かれる）

○望月宅・リビング（朝）

望月が朝食をとっていると、TVからスーパームーンに関するニュースが。

TVの音声「月が地球に最も近づくことで、満月が通常よりも大きく見えるスーパームーンが、今月18日に観測されます」

望月「スーパームーン…」

と、カレンダーに目をやる。

望月照彦（43）、起きてきて昇の隣に腰を下ろす。

TVの音声「今年のスーパームーンは23年ぶりの大きさになるとのことですが…」

照彦「…（少し、食いつく）」

望月「この辺でも綺麗に見えるかな」

照彦「見えるんじゃないか？ ほらあそこ、

あさひ公園。高台だし見晴らしがいいぞ」

望月「へえ、そうなんだ」

光「雨さえ降らなければ、だけどね」

と、台所で洗い物をしながら話す望月

光（41）。



○高校・教室（昼）

昼休み、ガヤガヤとした教室。

木村、廊下で友人と談笑している同じ学年の女子生徒・天野京子（17）の  
ことを見ている。

望月「ギブ・アンド・テイク」を読む。

木村「なあ望月」

望月「ん……？（と、本から目を離さず）」

木村「お前、気になってる人とかいんの？」

望月「……どうした急に、修学旅行まだだよ」

木村「いや……（と、口をつぐむ）」

望月、振り返って木村を見たあとその

視線の先にいる天野の存在に気付く。

望月「（本を閉じ）……声かけなよ」

木村「は……えっ……？」

望月「そういうわけじゃなくて？」

木村「なんで分かるんだよ、まだ何も……」

望月「分かるよ、僕も全く同じ境遇だし」

木村「お前も……？」

望月「うん、バイト先の話だけど」

×

×

×

(フラッシュ)

スーパーのバックヤード。

すれ違いざまに「お疲れ様です」と

微笑みかける灯里の姿。

望月、後ろ姿を目で追いかける。

×

×

×

望月「木村くんに言ったようにみせかけて、

自分にも言い聞かせてた」

木村「……声、かけろよ」

望月「……声かけなよ」

木村「声かけろよ」

望月「声……」

チャイムの音が2人の声を遮る。

○スーパー・青果売場(夕)

望月が品出しをしていると、灯里が前

から歩いてくる。

望月「えっ……？」

灯里、無言でブロッコリーを差し出す。

灯里「…これ、日配の方に放置されてました」

望月「あ、ああ…。ありがとうございます！」

灯里、少し微笑んで会釈をして去る。

望月、歩き去る灯里の後ろ姿を見つめ

ブロッコリーに目を落とし笑みを溢す。

大海航平（21）、望月を冷ややかな

目で見ながら台車を押して歩いてくる。

大海「何ブロッコリー見て興奮してんだよ」

望月「えっ、違いますよ」

大海「あっ…もしかして…？」

と、灯里の方をチラッと見て笑う。

望月「ちよつと…！」

大海「何、好きなの」

と、望月に近寄って揶揄う。

望月「いやいや、僕好きだなんて一言も…」

大海「ほとんど言ってるようなもんじゃん。

もう目が言ってるんだよ目が」

望月「言っていないですよ！　じゃあ今僕が目

はなんて言ってますか」

と、目を見開いて詰め寄る。

大海「（笑いながら）知らねえよ」

望月「分かるんでしょ、ほら：！」

大海、土居が自分たちの方に向かってくるのを発見して徐々に真顔に戻る。

大海「：俺の目が、土居さん来てるって」

2人、品出しをしている素振りをする。

土居「おつかれ〜」

望月と大海「お疲れ様です」

土居「急で悪いんだけど明日レジが人足りてないみたいで、どっちな明日の10時から19時で入ってもらえないかな」

大海、すかさず望月を指す。

望月「えっ：ちよつと：」

大海「レジ入ったら、あの子と喋れるかもよ」と、小声で囁く。

望月「：入ります！」

土居「あれ：というか望月くんって経験あるんだっけ？ まあいいや、明日よろしくね」

土居、歩き去る。

大海、望月を肘で小突く。

大海「感謝しろよな」

望月「…僕、レジやったことないんですけど」

大海「大丈夫、なんとかなる」

望月「ええ…」

○同・外観（昼）

入口を出入りする客たちの姿。

○同・レジ（昼）

混雑した店内。

望月、慣れない手つきでレジ打ち中。

大海、望月を見つけて列に並ぶ。

九条修（20）、レジ休止中のパネルを下げ、右隣のレジから大海を呼ぶ。

九条「お次の方こちらのレジへどうぞ」

大海、振り返って後ろに並んだ客に

大海「…先、どうぞ」

と、呼びかけて譲る。

前の客の会計が終わって大海の番に。

望月「大海さん…！」

大海「どう、順調？」

望月「はい、なんとか：まだちよつと慣れてない部分もありますけど：」

と、商品のスキャンを始める。

大海「じゃなくて、あの子と喋ったの？」

望月「ちよつと！（と、後ろを気にして）隣にいるんですから：」

大海「ごめんごめん」

望月「：それが全然そんな機会もなくて」

望月、商品のスキャンを終える。

大海、咄嗟にレジ横のお菓子を渡す。

大海「ま、そうか。後は休憩さえ被れば：」

望月「そうだといいんですけどね：」

望月、再びスキャンを終える。

大海「：あっ、あとこの袋も」

望月「はい：えーつと：」

大海「ああ、そののバーコードを打って：」

主婦「ちよつと、待ってるんだけど」

望月「すみません！」

望月、他人事のように笑う大海を睨む。

○同・休憩室（昼）

望月が疲弊した様子で席について弁当の蓋を開けると、大量のブロッコリーが入っている。

灯里「お疲れ様です」

と、入ってきて少し離れた席に座る。

望月「お、お疲れ様です！」

望月、慌てて弁当の蓋を閉じる。

灯里「今日はレジなんですね」

望月「えっ…」

灯里「いつもは青果の方にいますよね？」

望月「あっ、はい…そうです」

望月、申し訳程度に左腕で弁当を隠しながら食べ始める。

灯里「レジ、あんまり経験ないんですか？」

望月、むせる。

望月「なんでですか…？」

灯里「時々まごついてるのが見えるから」

望月「…すみません、実は初めてで」

灯里「やっぱそうだったんだ（と、笑う）」

○同・バックヤード（夕）

各部門の従業員たちが招集され、星野拓巳（43）の話聞いている。

望月、事務所前で作業をしている灯里を見つけてチラチラと見ている。

星野「えー、それでは接客5大用語の唱和を…じゃあ望月くん」

望月「えっ？ あ、はい！」

と、戸惑いながら前に出る。

灯里と目が合い、緊張を隠せない望月。

望月「…」

星野「どうした？」

望月「えーっと…いらっしやいませ！」

一同「いらっしやいませ！」

望月「…いらっしやいませ！」

一同「い、いらっしやいませ」

星野「…2回目（と、声を漏らす）」

望月「いらっしやいませ！」

星野「まだいく？」

一同、クスクスと笑う。



○同・裏口（夜）

外は雨模様。

望月が傘をささそうとしてしていると、後ろから土居が歩いてくる。

土居「うわ、結構降ってるな。参ったな…傘忘れちゃったよ」

望月「…これ、使いますか？」

土居「えっ…」

望月「…僕、裏にもう1本置いてるんで」

土居「いいの？ 助かるよ」

と、受け取った傘をさして帰っていく。

望月、再び店に戻る。

○同・事務所（夜）

望月、入ってくる。

望月「失礼します」

星野「いらっしやいませ」

望月「ちよっと、イジンないてくださいよ」

ちようどタイムカードを切っていた灯里がクスッと笑う。

望月「あっ…（会釈）」

星野「どうしたの？」

望月「あの、置き傘ってまだありますか？」

星野「あー…誰のか分かんないやつは先週に

全部捨てちゃった」

望月「そうですか…。失礼しました」

と、事務所を出る。

○同・バックヤード（夜）

望月が歩いていると、事務所から出て

きた灯里が後ろからやってくる。

灯里「傘忘れたんですか？」

望月「あっ、忘れたって言うかまあ…はい」

灯里「よかったら入っていきますか？ 私のに」

望月「えっ、いいんですか？」

灯里「着替えるからちよつと待ってて！」

灯里と入れ違いで男子更衣室から出て

くる九条。

望月「あっ…お疲れ様です」

九条「…お疲れ（と、無愛想に）」

○帰り道（夜）

望月と灯里、相合傘で歩いている。

望月「それで、よく見たらウォークマンじゃなくってフィナンシェだったんですよ」

灯里「（笑って）そんなことあります！？」

望月「確かに大きさも形も似てるけど…」

灯里「望月さんってこんなに面白い人だったんですね。クールなイメージだったから…  
なんか意外です」

望月「クールな方が良かったですか？」

灯里「ううん。ちょうどいい」

望月「ちょうどいい…？」

灯里「無口でもなくうるさくもなく、チャラくもなく真面目でもなく…って感じ？」

望月「（照れて）…ありがとうございます」

○アパート・外観（夜）

2人、歩いてくる。

灯里「ここが私人家です」

望月「あ：傘、ありがとうございました」

と、傘から出ようとする。

灯里「このまま使ってください。次会った時に返してくれたらいいので」

望月「いいんですか？」

灯里「（微笑んで）もちろん」

望月「ありがとうございます！」

灯里「こちらこそ」

望月「え？」

灯里「お話しできて楽しかった。じゃ！」

と、屋根の下まで駆けていく。

望月「僕も楽しかったです！」

手を振り中へ入っていく灯里の後ろ姿を見届け、小さくガッツポーズ。

画面奥に進んでいく望月。

歩き出した軽やかな足取りは、やがてスキップに変わる。

望月「（雨に唄えばの鼻歌）」

角から出てきた車、望月を轆きかけて急ブレーキをかける。

運転手「浮かれるなガキ！」

○望月宅・リビング（夜）

カレンダーのスーパーマンの日に印をつけてニヤニヤしている望月。

光「昇、明日バイト？」

望月「明日は休みだけど、なんで？」

光「卵買ってきてって頼もうと思っただけ」

望月「いいよ、学校帰りに買ってくる」

光「なんか機嫌いいね」

望月「分かる？」

○高校・教室（朝）

英語の小テストを解く生徒たち。

河島「はいそこまで。隣とプリント交換して赤ペンを出してください」

生徒たち、プリントを交換。

望月、水嶋の答案を見て呆れた表情。

× × ×

水嶋、0点の答案を受け取り残念がる。

望月、満点に満足げな表情。

水嶋「なんでそんなに点取れるの？」

望月「自分で課題やってるからね。しかも、

君の分まで」

水嶋「まあそうか？」

望月「中間とか期末にもこれと同じ問題出る

から今やってた方が絶対得するよ」

水嶋、噛み締めるように頷く。

木村「水嶋、何点？」

望月「0（と、揶揄うように笑う）」

水嶋「言うなって！」

望月「何点だった？」

木村「俺？ 3点」

水嶋「なんでお前の方が高いんだよ」

望月「どんぐりの背比べじゃん」

3人、笑う。

○スーパー・レジ（夜）

灯里、時計と睨めっこをしている。

時計の針が7時をさし、レジ休止中の

パネルを置こうとする。

望月「日向さん！」

と、滑り込みでレジにやってくる。

灯里「あ、望月くん」

灯里、望月が持っている卵のパックに  
目を落とす。

望月「すみません。傘も持ってきました」

○同・裏口（夜）

灯里「おまたせー」

と、出てくる。

望月「お疲れ様です。あ、これ：ありがとう  
ございました。助かりました」

と、傘を返す。

灯里「いえいえ、どういたしまして」

2人、沈黙。

灯里「えつと：じゃあ：」

望月「良かったら、お茶でもしませんか？」

灯里「えつ：」

望月「あーいえ、ダメだったら全然：」

灯里「ううん、ぜひ（と、微笑む）」

望月、会釈して「こっち」と指す。

○カフェ・店内（夜）

窓際の席で向かい合って座る2人。

ドーナツを食べながら話している。

望月「ごめんなさい、僕が誘ったのに払って  
もらって……。今返しましょうか？」

灯里「いや、いいんです。私年上だし……」

望月「そんなの関係ないですよ。もともと  
傘のお返しをするつもりだったのに……」

灯里「お気持ちだけ。……それに、本当は私も  
誘おうと思つてので」

望月「（驚いて）ええ……、ほんとですか？」

灯里「はい。あの……、良かったらタメ口で」

望月「……頑張ります」

灯里「私も、頑張る」

と、笑い合う2人。

灯里「そういや、この間読んだ本に面白い話  
が書いてあつて……」

望月「どんなのですか？」

灯里「楽観主義者はドーナツを見て、悲観主  
義者はその穴を見る……知ってる？」



望月「いえ、初めて聞きました。ちなみに、

日向さんはどっちなんですか：？」

灯里、ドーナツを手に取って穴から目

を覗かせる。

望月「：僕も」

と、灯里の真似をして笑う。

○帰り道（夜）

望月と灯里、歩いている。

望月「僕も：この間読んだ本に、面白い話が」

灯里「どんなの？」

望月「与える人が報われるって。ギブ&テイ

クです。僕：普段から人の頼み事を何でも

引き受ける癖があって：」

灯里「優しいんですね」

望月、首を横に振ってうつむく。

望月「自分でもそれが苦痛だったんです。ど

れだけ与えても、いいことなんて一つもあ

りやしないって。でも正しかった」

灯里「何か良いことあったんですか？」

望月「…今」

灯里「何それ、ズルい（と、照れて笑う）」

望月「本当は傘、持ってきてたんです」

灯里「（驚いて）そうなんですか!？」

望月「社員さんに貸したんです。そのお陰で

今…灯里さんとううやうやうお話しできてる。

やっぱりあの本は嘘なんについてなかった」

灯里「そうやって思ってくれて、私も嬉しい」

○アパート・外観（夜）

望月「今日はありがとうございました」

灯里「こちらこそ、ご馳走さま」

望月「じゃあまた…、バイトで」

灯里「うん！ バイトで」

望月「あつ、あの…」

望月、スマホを出してメッセージアプリ

リのQRコードを見せる。

望月「良かったら…。ま、またバイトのこと

で何か聞くかもしれないし…」

灯里「もちろん」

灯里、スマホを出してQRコードを読み込んで友達追加をする。

望月「ありがとうございます！」

灯里「いえいえ」

望月「じゃあ：気をつけて」

灯里「望月くんがね」

望月「そっか」

と、恥ずかしそうに笑って歩き出す。

灯里、小さく手をあげて見送る。

○坂道（夜）

望月、悦に浸りながらゆっくりと歩く。手に持ったスーパーのレジ袋（中は卵）の存在を思い出す。

望月「…あ！」

慌てて駆け出す。

○スーパー・青果売場（夕）

望月、商品を積んだ台車を押しながら軽快な足取りで歩いている。

○高校・教室（昼）

英語の授業中。

望月、いきいきとした表情で黒板の穴埋め問題を解く。

○望月宅・リビング（夜）

望月と照彦と光、談笑しながら夜ご飯を食べている。

○同・自室（夜）

望月、灯里とメッセージのやりとりをしている。

○高校・教室（昼）

望月、率先して周囲の掃除を手伝う。

○スーパー・青果売場（夕）

望月（軽快な足取りで闊歩しながら）、棚の上の商品を取れず困っている高齢の女性客を見つけ、手助けする。

偶然通りかかった灯里がそれを見て、  
微笑みながら見ている。  
望月、笑顔で会釈。

○高校・教室（昼）

教室で談笑する望月と水嶋と木村。

○スーパー・青果売場（夜）

望月、華麗な手捌きで売場を整理中。  
土居、背後から冷たい視線を送る。

○帰り道（夜）

望月と灯里、談笑しながら歩いている。  
それを影から見ている人物の後ろ姿。

○望月宅・外観（夜）

望月、玄関の前で夜空の月（半月）を  
見上げて満足げに微笑んで入る。

○高校・教室（昼）

昼休み。

望月、水嶋に勉強を教えている。

ふと廊下を見ると、天野と喋っている

木村の姿が。

水嶋「…で、ここは？」

望月「ああ、そこは…」

木村、2人のもとにやってくる。

木村「え、遂に本気出した？」

望月「負けたのがよっぽど悔しかったらしい」

木村「ま、せいぜい頑張りな」

水嶋「まぐれだろ3点」

木村「やんのか0点この野郎」

水嶋「いけ10点」

と、吐き捨てて再び問題に取り掛かる。

望月、笑う。

木村「…どうしよう」

望月「…どうした？」

木村「天野さんとカラオケ行くことになった」

望月「水嶋くん、今日の放課後カラオケ行こ」

木村「バカ！ お前…！」

水嶋「いいよ。木村も行くの？」

木村「あーいや、俺は：今日バイトでさ…」  
と、咄嗟に誤魔化す。

○カラオケ（夜）

望月、歌っている。

（例えばスピッツの「君は太陽」）

○同・廊下（夜）

望月、キョロキョロと周りを見渡しなが  
ら木村と天野のいる部屋を覗く。

水嶋、後ろからやってくる。

水嶋「望月、何やってんの」

望月「しーっ！」

水嶋、望月の背後に隠れ部屋を覗く。

水嶋「…木村じゃん！ あいつバイトじゃ…」

望月、咄嗟に水嶋の口を塞ぐ。

扉越しに、木村が天野に告白する姿。

天野、照れた様子で返事をしている。

木村「やったー！」

と、両手をあげて喜ぶ声が聞こえる。

水嶋「告ったの…？」

望月「木村くんには内緒にしておいて…」

木村、2人の視線に勘づいて振り向く。

望月と水嶋「うわっ！」

○繁華街・カラオケ店の前の道（夜）

望月と水嶋、木村と天野が出てくる。

木村「じゃ、俺らちよっと寄り道して帰るわ」

と、別の方向に天野と歩き出す。

水嶋「おう」

望月と水嶋、歩き出す。

望月「青春だねえ…」

水嶋「呑気なこと言ってんじゃないよ。俺ら

も頑張らないと」

望月「…（少しニタニタして）」

水嶋「えっ、何…もしかしてお前も!？」

望月「いや…（ニタニタが止まらず）」

水嶋「えっ何何、え、どっちどっち!？」

望月「…ごめんね」



水嶋「待つてよ、浮いた話ないの俺だけ？」

望月「…ごめん！」

水嶋「そのごめんって言うのやめて？」

望月、道の先に信号待ちをする灯里を見つける。

望月「…あっ」

水嶋「何？」

と、立ち止まり望月の視線の先にいる灯里の存在に気付く。

水嶋「…いいよ、行けよ」

望月「…ごめん！　ありがとう！」

水嶋、灯里の元へ駆ける望月を呆然と見送って溜息をつく。

### ○繁華街・道（夜）

望月と灯里、歩いている。

灯里「珍しいね、両方オフの日に会うなんて」

望月「確かに、今までバイト帰りだったから。

今日は何してたんですか？」

灯里「高校の時の友達と飲んでた」

望月「ああ…大人だ…」

灯里「…ダメ？（と、あざとく笑う）」

望月「えっ…いやいや好きです。え、違う！

そういう意味じゃなくて…！（あたふた）」

灯里「…ハタチになったら、一緒に飲もうね」

望月「あっ…はい、すぐに追いつくんで！」

灯里「追いつくのは無理だよ（と、笑う）」

望月「あーそうか…」

### ○帰り道（夜）

望月「月、綺麗ですよ」

立ち止まって夜空を見上げる2人。

そこには殆ど満月に近い月が浮かんで。

灯里「ほんとだ…綺麗。満月じゃないけど」

望月「欠けてるように見えるけど、照らされ

てないだけで月はいつだって満月なんです」

灯里「確かに、見えてる部分でしか考えた事

なかった」

望月「…ほら、日向さんが言ってくれたじゃないですか」

灯里「…私？」

望月「ドーナツを見ろ！つて」

灯里「ドーナツを見ろとは言っていないけどね」

望月「…そういえば、今度の満月。言っても

もう明日なんですけど、スーパームーンだ

って知ってましたか？ それも、23年ぶ

りの大きさだとか…」

灯里「へえ、そうなんだ」

望月「一緒に見に行きませんか？ ちょっと

歩きますけど、ちょうどいい公園があつて」

灯里「もしかして、あさひ公園？」

望月「そうそう！ 行ったことありますか？」

灯里「まだないんだよね、行ってみたい」

望月「ほんと？ じゃあ、ぜひ…」

灯里「うん！（と、微笑んで頷く）」

○灯里のアパート・外観（夜）

望月「…じゃあ、明日の夜8時にあさひ公園

の前で。バイト終わったらまた連絡します」

灯里「うん、ありがとう。誘ってくれて」

望月「いえいえ…じゃ」

と、小さく手を上げる。

灯里、望月の後方に目をやり一瞬表情が曇る。

望月「えっ…どうかしましたか？」

灯里「…うん、なんでもない！　じゃあ…

また連絡するね（と、ぎこちなく笑って）」

足早に中へと入っていく灯里を、呆然と立ち尽くして心配げに見送る望月。

その背後から、怪しげな人物が灯里を追いかけるように望月の肩にぶつかって中へ入っていく。

通りすがりに一瞬見えた顔、九条で。

望月「（怪訝な表情で）えっ…？」

○望月家・リビング（夜）

光、台所で洗い物をしている。

TVの天気予報では、明日の夕方から夜にかけて雨が降るといふ情報が。

光「…」

○高校・教室（昼）

授業中。

後方・窓際に座る望月の席は、日光に照らされている。

望月、昨夜のことが気がかりで上の空。太陽に翳りがさし、教室がどんよりと暗くなる。

○同・青果売場（夕）

望月、モヤモヤとした表情で品出し中。足したそばから客が商品を取り、売場にぽっかりと穴が空く。

望月「……（深い溜息）」

ふと手を止め、レジの方を見るとそこには九条の姿が。

望月、九条に怪しむ目を向ける。

大海、歩いてくる。

大海「おつかれ〜」

望月「…お疲れ様です」

大海「どうした、元気ないじゃん」

望月「あの：日向さんと九条さんって：付き合ってるんですか？」

大海「いや：俺が聞いたのはだいぶ前だけど、別れたんじゃないかって：？」

望月「昨日：九条さんらしき人が日向さん家に入っていくのを見て」

大海「ええ：？ 復縁したとは考えられないけどな：。まさか、付きまといとか。そういえば、あの九条って子：付き合ってた頃から怪しい評判あつて」

望月「それはどういう：」

大海「レジのパートさんの会話を盗み聞いただけだから真偽は定かではないけど：痣が」  
望月「痣：？」

大海「日向さんの腕に、痣が出来てたって。理由聞いてもはぐらかされたみたいだけど、なんかその頃：側から見ても分かるくらいにはギスギスしてたみたい。しばらくして別れたって話してたから、噂ではDVじゃないかって」

望月「…そうだったんですね。そんなこと…  
全然知らなかった」

大海「直接聞いたわけじゃないし、あくまで  
噂だよ」

○スーパー・更衣室（夕）

望月、エプロンを脱いでスマホを見る。  
灯里に送った「大丈夫ですか？」との  
メッセージは未読のままになっている。

望月「…:…:」

九条、入ってくる。

望月「…お疲れさまです」

九条「（望月をチラッと見て）…:…:」

望月、気まずそうに着替え始める。

九条「最近、灯里と仲良さそうじゃん」

望月「…え？」

九条「勘違いすんなよ」

望月「…:…:」

九条、そそくさと着替えを終わらせて  
出ていく。

○同・裏口（夜）

雨が降っている。

望月、落胆した様子で立ち尽くす。

土居、出てくる。

土居「傘、忘れたの？」

望月「はい…」

土居「…これ、使って」

望月「えっ…いいんですか？」

土居「この間貸してもらったからさ」

望月「でも」

土居「大丈夫大丈夫、家近いから。お疲れ！」

と、傘を渡して雨の中走っていく。

望月「ありがとうございます！」

○同・灯里の部屋（夜）

灯里、身支度を済ませメイクをする。

九条、帰ってくる。

灯里「（溜息をつき）…もう帰ってこないで

って言ったよね。鍵返してよ」

九条「どこ行くんだよ」



灯里「アンタには関係ない」

九条「もしかしてアイツか」

灯里「関係ないって言ってるでしょ」

九条、灯里の腕を力強く掴む。

灯里「離して！」

と、振り解こうとするも力及ばず。

九条「…行かせないぞ」

○あさひ公園・入口（夜）

雨の中、傘をさして灯里を待つ望月。

ふとスマホを開くと、時刻は既に8時半を回っている。

望月「…（溜息）」

スマホをポケットに入れようとする  
と通知音が鳴り、再びスマホを取り出す。  
そこには灯里からの「今日、行けない  
かも」とのメッセージが。

望月「…！！？」

慌てて「どうしたんですか？」と送信  
するも既読になったまま返信はない。

○アパート・灯里の部屋（夜）

灯里、望月にメッセージを打っている。

九条「おい、誰に連絡してんだよ！」

と、奪い取ろうとする。

灯里「やめて！」

○あさひ公園・入口（夜）

灯里に「大丈夫ですか？」と打ち込む

望月の手元。

灯里から「302」という返信が届き

すぐに送信が取り消される。

望月「えっ…何これ、何の数字？」

○アパート・灯里の部屋（夜）

九条、灯里の送ったメッセージを取り

消してスマホをベッドに放る。

九条「これは俺とお前の問題だろ、他の奴は

関係ない。ま…あんなのでわざわざここに

来るような勘の良い奴はいないだろうけど」

灯里「…来るよ、きっと」

○坂道（夜）

望月、傘をさして競歩のような速度で  
アパートを指して坂を下っている。

その表情は、覚悟に満ちている。

× × ×

（フラッシュ）

九条「最近、灯里と仲良さそうじゃん」

九条「勘違いすんなよ」

× × ×

（フラッシュ）

望月の肩にぶつかりアパートへ入って  
いく九条。

× × ×

（フラッシュ）

大海「噂ではDVじゃないかって」

× × ×

徐々に速度を早め、やがて走り出す。

○望月宅・リビング（夜）

窓の外を眺めている照彦と光。

照彦「…やむといいな、今度こそ」

光「…やむよ、きっと」

照彦「あの日は結局やまなかったけど、あの

場所で出会えたことに意味があったんだな」

光「やめてよ、急に（と、照れて笑う）」

照彦「先、ご飯食べてようか」

光「そうだね」

○アパート・灯里の部屋（夜）

嫌がる灯里の肩を抱き、迫る九条。

灯里、九条を突き放す。

九条、灯里の頬を叩く。

灯里「（九条を睨んで）…もう警察呼ぶから」

九条「警察？（と、鼻で笑い）大袈裟な…。

ただの痴情のもつれです、なんで言えば、

どうせそれ以上は介入出来ないだろ」

○同・外観（夜）

望月、息を切らしてやってくる。

3階を見上げ、中へと駆け込む。

○同・灯里の部屋（夜）

九条「警察は民事不介入だから！」

灯里「だから、暴力振るっただでしょ。それは

立派な暴行罪じゃないのって言ってんの」

九条「いやいやそれは…」

インターホンが鳴る。

灯里「…！」

灯里、玄関へと走る。

九条「おい、開けるな！」

○同・灯里の部屋・玄関前（夜）

望月、扉に耳を当てて中の声を聞く。

○同・灯里の部屋・玄関（夜）

九条「おい！」

灯里、九条の手を振り解いて開ける。

○同・灯里の部屋・玄関前（夜）

望月が扉の前で中の様子を伺っている  
と、突然開いた扉に頭をぶつける。

望月「あいてっ…」

灯里「ごめん望月くん、来てくれたんだ…」

と、扉の隙間から覗く。

○同・灯里の部屋・玄関（夜）

望月、頭を抑えながら入ってくる。

望月「お邪魔します…」

灯里「案外又ルツと入ってくるんだね」

望月「え、逆に他に何かありますか？」

灯里「灯里さんから離れろ！みたいな」

望月「いやいや映画じゃないんだから」

灯里「そうだよね（と、笑って）」

九条、フツと笑う。

望月「アンタは笑うな！」

九条「…」

望月「どうしたんですか、それ」

と、赤くなった頬を指摘。

灯里「殴られたの」

九条「殴ってない、叩いたんだ」

望月「殴ったんじゃないかって叩いたそうです」

灯里「一緒にでしょ！？」

望月「一緒ですよ何言ってるんですか！ 口

応えしないでください！」

九条「なんなんだよお前！」

と、望月の胸ぐらを掴む。

望月「青果の望月です…！」

九条「そんなこと聞いてんじゃねえんだよ！

ってか知ってたんだよ…！」

望月「…ありがとうございます」

灯里「やめて…！」

九条の手を離そうとして振り払われる。

九条「急に現れて邪魔しやがって！」

望月の胸ぐらを掴んだまま揺さぶる。

望月「離してください…！」

と、九条の顔を両手で押しつける。

九条の顔が歪む。

九条「やめろよ顔伸びるだろ…顔伸びるって

なんだよ！」

九条、望月のお腹を殴る。

望月、その場に倒れ込む。

灯里「（絶句）……！」

九条「コイツが首突っ込んできたのが悪い」

灯里「…最低。もうほんとに警察呼ぶから」

と、部屋にスマホを取りに行く。

○同・灯里の部屋（夜）

灯里、ベッドからスマホを拾い110

番を入力する。

九条「やめろって！」

と、奪い取ろうとしてかわされる。

灯里「じゃあもう私にも望月くんにも近づか

ないって約束して！」

九条「俺はただお前とやり直したいだけだ」

灯里「はあ？ 私がアンタのお陰でどれだけ

辛い思いしたと思ってるの。散々裏切って

おいて、都合のいいように利用しないで」

九条「利用って…人聞きの悪い」

灯里「何が違うの？ アンタは自分の欲を満

たしたいだけ、寂しさを埋めたいだけで…

私じゃなくて誰でもいいんでしょ！」



九条「灯里だけだよ……」

と、灯里の腕を掴む。

望月、後ろからやってきて九条の手を

灯里から引き離す。

望月「やめてください、嫌がってるでしょ」

九条「お前には関係ないだろ！」

望月「関係ありますよ！ 日向さんのこと大

好きですもん！ だから彼女を傷つける奴

は許したくありません……！！」

灯里「えっ」

九条「本当に好きなら、力づくで奪ってみろ」

望月「だから、映画じゃないんだから……」

九条、望月を殴る。

望月、鼻血を出してよろける。

望月「日向さんは、あなたの足りない物を埋

めるための道具なんかじゃない……！！」

と、言っつて倒れる。

灯里「望月くん……！！」

灯里、九条を睨んで拳を固める。

九条「何言ってるんだよ。なあ？」

九条がへらへらと笑いながら灯里の方を振り返ると、灯里の渾身の一撃が顔にクリーンヒット。

その場にまっすぐ倒れ込む。

灯里、自分でも驚いた表情で大きな口を開けて拳を見ている。

ふと我に返って、望月に駆け寄る。

灯里「…大丈夫!？」

望月「最初からそれやってよ…」

と、鼻をつまみながら。

灯里「ごめん、私もこれは想定外」

望月「日向さんが無事でよかった」

灯里「ごめんね、ありがとう…」

望月「月…、見に行きましょう…」

灯里「へ!？」

○同・外観（夜）

望月と灯里、出てくる。

望月「あ…雨、弱まってる」

灯里「ねえ、ほんとに大丈夫!？」

望月「大丈夫！ 鼻血も止まったし！」

と、鼻から手を離してダブルピース。

鼻からツーツと血が垂れてくる。

望月「ごめん、ティッシュュ！」

灯里「あ、ついでに！」

○同・灯里の部屋（夜）

望月、入ってくる。

倒れた九条のそばに転がっている箱の

ティッシュュから数枚取って鼻に詰める。

九条「……？（と、ぼんやり顔を上げる）」

望月「すみません：失礼します」

と、鼻にティッシュュを詰め込みながら

九条の顔にパンチを浴びせる。

望月、九条のズボンのポケットから鍵

を拝借して部屋を出ていく。

○同・外観（夜）

望月、小走りで出てきて灯里に鍵を投  
げてパスする。

灯里「（受け取って）…ありがとう！」

望月「こっちです！」

と、灯里を案内。

○坂道（夜）

望月と灯里、上っていく。

灯里「雨はやんだけど、こんな天気じゃ…」

望月「大丈夫です、きっと晴れますから」

灯里「ええ…」

○あさひ公園・入口（夜）

望月と灯里、やってくる。

望月「この上です」

と、長い階段を指す。

灯里「これ上るんですか？」

望月、ぎこちなく手を差し出す。

灯里「えっ…」

望月「…滑ったら危ないので」

灯里「（微笑んで）…ありがとう」

と、手を握る。

階段を上っていく2人。

○あさひ公園・頂上（夜）

2人、階段を上ってくる。

望月「着いた〜！」

灯里「ふう」

望月、繋いだ手に目をやって

望月「すみません」

と、慌てて離す。

灯里、再び望月の手を握る。

望月「えっ…！」

灯里「転んだら危ないし」

望月「…そうですね（と、照れ臭そうに）」

×

×

×

ベンチに座る2人。

灯里「ねえ、そろそろ取ったら？」

と、望月の鼻に詰まったティッシュを

指す。

望月「…もうちょっとだけ」

灯里「そっか」

望月「はい…」

灯里「さっき言ってたことって本心？」

望月「え？」

灯里「あーほら、九条くんの前で言ってた」

望月「…聞いてました？」

灯里「うん、だってその場にいたし」

望月「…本心ですよ。もちろん」

灯里「（微笑んで）…そっか。私も」

望月「ええ！？」

灯里「今更驚かないですよ。なんとなく分かってたくせに…」

望月「だって僕、灯里さんのことずっと…」

灯里「…？」

望月「ずっと前から好きでしたから…。でも歳も違うし、部門も違うし…喋ることさえ叶わないと思ってる…今もこうしてるのが嘘みたいで…」

灯里「ああ…だからずっと見てたんだ」

望月「…え！？」

灯里「青果の方からよく視線感じてたもん」

望月「うそ！？」

灯里「最初野菜に見られてるのかと思ったよ。  
ほら、振り向いたら視線そらしてたでしょ」

望月「…バレてた」

灯里「分かりやすいよ」

望月「…恥ずかしいです」

望月がふと顔を上げると、雲がはれて  
月が垣間見える。

望月「…あっ！」

灯里「晴れた！」

夜空に浮かぶスーパームーン。

しかし、そこまでの迫力はない。

月光に照らされる2人。

望月「なんか…スーパーって言っても、普通の満月と大差ないって言うか…。意外と小さいなあ、って感じですよね」

灯里「確かにそうだね（と、微笑む）」

望月「でも、ずっとこの日を待ち望んでたんです。満月の日には、何かが変わるんじゃないか…みたいないな」

灯里「…私も九条くんのことですとずっと悩んだの。でも、誰にも言えなかった。そんな時に望月くんがさ、そこから連れ出してくれたんだよ」

望月「…そういえば九条さん！ まだ帰ってなかったらどうしよう…」

灯里「じゃあ、もう少しだけここにいようと、距離を詰めて座る。」

望月「そうですね」

月光に照らされる中、寄り添う2人。

夜空の月をバックに見つめ合う。

灯里、望月の鼻からティッシュを抜く。

望月、それを受け取って。

望月「…：…：…」

2人、静かにキスを交わす。

○アパート・灯里の部屋（夜）

望月と灯里、入ってくる。

灯里「うわっ…！！！」

望月「どうしました！？」



九条、部屋の真ん中で鼻に氷を当てて座っている。

灯里「何、まだ懲りないの？」

望月、灯里を庇って後ろに立たせる。

九条「…懲りたよ、でも鍵だけは返してくれ」

望月「ダメです、これ以上日向さんに近づか

せるわけにはいきません」

九条「じゃなくて…」

と、ポケットから別の鍵を出す。

灯里「え…」

九条「お前、鍵取っただろ。あれ、俺ん家の

鍵なんだよ…」

灯里、ポケットから鍵を出して見る。

灯里「…ホントだ、何これ」

望月「…すみません」

灯里、恐る恐る鍵を交換する。

立ち上がる九条、身構える望月と灯里。

九条「…何もしないよ。…悪かったな」

と、部屋を出ていく。

望月と灯里、安堵の表情。

○望月宅・リビング（夜）

望月「ただいまー」

と、入ってくる。

照彦と光、縁側に立って月を見ている。

望月、カレンダーに灯里とのデートの

予定を書き込む。

光「おかえり」

照彦「昇、ここからでもよく見えるぞ」

望月、2人の間に立って月を見上げる。

望月「ホントだ、晴れて良かった」

光「私たち、ずっと待ってたのかもね。あの

日から：」

望月「あの日：？」

光「内緒」

望月「なんでよ、教えてよ」

照彦「昇こそ、誰と見てきたんだよ」

望月「：言わない」

光「じゃあお母さんも言わない」

望月「ええ、いいじゃんか」

光「ダメ」

カレンダーのそばに飾られた写真立てには、23年前のスーパームーンの日  
に雨のあさひ公園で撮られた照彦と光  
の写真が置かれている。

和気藹々と談笑する3人の声が響く。

○カフェ・店内（昼）

望月と灯里、ドーナツを食べている。

灯里「ねえ、このあとどうする？」

望月「灯里はどこ行きたい？」

灯里「うーん、水族園とか？」

望月「あつ、いいじゃん。行こ行こ！」

店員「お待たせ致しましたホットコー…」

2人、店員の顔を見て驚いた表情。

コーヒーを運んできたのは九条だ。

九条「…ごゆっくり、末長どうぞ」

と、そそくさと去っていく。

2人、顔を見合わせて笑う。

灯里「あ、昇さ…この間プラネタリウム行き  
たいてって言ってなかったっけ」

望月「あ、そうじゃん」

灯里「じゃあ水族園は来週にしてさ、今日は

プラネタリウム行こうよ」

望月「そうしよっか」

2人は幸せそうな表情で笑い合う。

了